

『今月の天候と農作業』

通巻第5584号
10月号
平成27年 9月 24日発行
宮 崎 県
宮 崎 地 方 気 象 台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【予報のポイント】

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

【確率(%)】

| 要素 | 予報対象地域 | 低い (少ない) | 平年並 | 高い (多い) |
|------|--------|-------------|-----|------------|
| 気温 | 九州南部 | 40 | 30 | 30 |
| 降水量 | 九州南部 | 30 | 40 | 30 |
| 日照時間 | 九州南部 | 30 | 40 | 30 |

【概要】

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

。<1週目の予報> 9月26日(土)～10月2日(金)

気圧の谷や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間の中頃以降に雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、費別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 10月3日(土)～10月9日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 10月10日(土)～10月23日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 普通期水稻

収穫時期は慌ただしく、一瞬の油断や操作ミスがケガや事故となるので、慎重に作業しましょう。

1 適期収穫等

収穫適期は、不稔籾を除いた全籾数の8割が黄化したときで、ほ場ごとに籾色をよく観察します。倒伏すると茶米や穂発芽が発生している場合があるので、刈分けを行い全体の品質が低下しないようにします。風雨でほ場にゴミが流入していると、機械の故障の原因にもなるので予め除きます。まいひかり等の晩生品種では、中旬までは水を入れ登熟や収量の向上を図ります。

2 乾燥調整

高水分の生籾を高温で急激に乾燥すると胴割粒が発生します。熱風温度は40度以下で、毎時の水分減少は0.8%以下で行い、仕上げの玄米水分は14.6～15.0%となるようにします。

複数の品種を扱う場合は、機械や袋等の清掃はこまめに行い混米防止に努めましょう。

◆ 大豆

1 排水対策

今年は台風で株が傾いたほ場や、播種作業の遅れで十分な培土ができず畦も低いほ場が多く見られます。湿害対策を徹底するため、排水溝の埋没等は早めに補修します。

2 病虫害防除

カメムシは生育後期まで莢を加害し、被害が激しいと株は収穫時期になっても落葉せず青立ちのままとなります。ほ場を観察し農薬基準を遵守し防除を行います。

◆ ソバ

子実肥大期に入るので、降雨後に停滞水のあるところは追加で排水溝を設けるなど、こまめな管理は重要です。特に水田では周囲に溝を設置すると効果的です。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

急な冷え込みに備え、暖房機の整備・点検を行うとともにダクトの設置など、いつでも稼働できるよう準備しておきます。また内張ビニルの設置が終わっていないほ場では、早目に作業を終え、いつでも保温を開始できるようしっかり準備を行いましょ。

暖房用燃料を節減するためには、ハウス内の気密性を高めることが重要です。ハウスの外張ビニルに破損や隙間がないか確認を行いましょ。また、内張ビニルは谷部やサイド部分のつなぎ目に隙間ができやすくなりますので、丁寧な作業に心掛けましょ。

◆ きゅうり

ハウス抑制栽培は主枝の収穫期で、側枝も発生して早いものでは側枝からの収穫も始まります。側枝の発生をよくするため、やや多目のかん水を行うとともに主枝の摘心が遅れないよう注意しましょ。追肥は、1回目は主枝摘心の1週間前に行い、その後側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用しましょ。側枝の収穫開始以降は、収穫の最盛期を迎えますので、草勢が低下しないよう注意しましょ。また、光線の透過を良くするために、主枝の摘心後より中段の葉から順次摘葉を行いましょ。

促成栽培は育苗期の後半から定植時期となります。苗床では、徒長しないよう昼間十分日光にあて、本葉2.5枚以降は昼温25度前後、夜間は14度を下限に管理しましょ。

◆ ピーマン

促成ピーマンは整枝・誘引期になります。この段階での枝づくりは年内だけでなく、全期間の収量を左右しましょので注意を要しましょ。第2分枝を主枝としましょが、第3分枝が強い場合には、ねん枝等を行い主枝の伸長を促しましょ。また、着果が多く、草勢が弱い場合には、1～2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の樹体づくりに努めましょ。かん水は畦全体に十分かかるように行いましょが、軟弱徒長を防止するために過度のかん水は控えます。

◆ トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは定植後、異常茎（メガネ）の発生を

抑制するため、かん水量を制限した管理を行っていますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安にかん水、追肥を開始します。かん水は草勢を見ながら行いますが、かん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるためタイミングを失しないよう注意してください。

◆ いちご

今年は、曇雨天の影響で花芽分化が遅れ気味のところも見られましたが、9月に入り、気温の低下とともに、花芽は例年並みの状況となっています。頂花房の発蕾は10日前後と予想され、同時期に第1次腋花房の分化期となりますので、遅れないようマルチ被覆を行うとともに、追肥を開始します。追肥は10㎡当たり窒素成分で0.3～0.5kg/日を液肥で施用します。

(黒木 正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ キャベツ・レタス

キャベツは播種後120日から150日で収穫期を迎えるため、結球具合をみながら随時収穫しましょう。

レタスは12月出荷の定植期、2～3月出荷の播種期となります。生育適温は15度から20度ですので、12月上旬にはトンネル被覆が必要となります。

◆ たまねぎ

翌春3月以降に出荷する作型の播種期となります。10㎡に対し、かん水が出来て排水の良い苗床を50㎡用意し、完熟堆肥200kg、苦土石灰8.0kg、チッソ1.8kg・リンサン2.8kg・カリ0.8kg（いずれも苗床50㎡あたり）を施用し中旬までに播種してください。播種後覆土し、たっぷりかん水した後は発芽まで乾燥しないよう新聞紙等で覆います。

◆ しょうが

降霜の前に収穫することが必要となるため、霜の早い地区では下旬頃から収穫を行います。掘り上げたら、できるだけ早く茎を切り落とし、茎やシー

トで塊茎を覆って乾燥を防ぎましょう。

◆ 食用かんしょ

5～6月に植え付けたものの収穫期です。食用かんしょは生育日数が130日以上になると、過肥大によりいもの形や皮色が悪くなりますので、今月中には収穫を終えましょう。

◆ さといも

中生種の収穫期となります。「枯れ上がり症状」の見られたほ場や、「芽つぶれ症」や「乾腐病」の疑いがあるものについては翌年の種芋としては使用を避けてください。

◆ ほうれんそう

加工用では厳寒期に収穫する作型の播種期となります。地力の高い排水の良いほ場を選定し、深耕や排水溝等を事前に準備します。また、除草剤は土壤が乾燥しすぎた状態では効果が劣るので土壤水分が適湿の状態です。散布します。

(杉村 幸代)

果樹

1 常緑果樹

◆ 極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥、かん水を行います。収穫後に秋枝が発生すると翌年の花芽が大きく減少するので、発芽が見られなくなる10月中旬以降に実施しましょう。また、窒素成分の葉面散布は樹勢回復に効果が高いので、5～7日間隔で3回以上行いましょう。

今年は園地や樹によって結果量にばらつきがあります。結果量が少なかった樹では、翌春の着花量が多くなり、隔年結果が激しくなります。10月中旬頃から夏秋梢の整理を行い、翌年の着花数を調整しましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は、7月と8月の花が結実している園が多く見られ、平年よりもかなり果実肥大が遅れています。上旬までにビニル被覆を行い、昼間の温度は28度、夜間は21度以上を目安に加温することで、果実肥大を確保しましょう。

◆ マンゴー

今年は収穫の遅れから、新梢の発生や充実が遅れている園地が多く見られます。そのような園では、夜間の加温と昼間の高温管理、葉面散布により、新梢の緑化を早めましょう。

最近、果実の軸腐病の発生が増加しています。樹冠内に残る枯れ枝に発生する黒色の胞子が軸腐病の原因です。ハウス内の胞子の密度を下げるため、加温が始まるまでに枯れ枝を全て取り除きましょう。炭そ病対策と併せて、施設内の剪定残さは全て施設の外に持ち出しましょう。

2 落葉果樹

◆ 礼肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分だと、翌年の新梢発生や開花結実が悪くなります。根が活発に活動している10月に施肥を行いましょう。

◆ くり

収穫後のイガは、実腐病、モモノゴマダラノメイガ等の越冬場所となり、翌年の発生源となるので、土中に埋めるなど処分しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 花き全般

10月に入ると夜温が低下します。特に中山間地域では急激に低下し、降霜による被害の恐れもあります。施設栽培では保温・加温だけでなく、微生物農薬のダクト散布が実施できるように暖房機のダクトを早めに設置してください。

◆ キク

秋ギクの「神馬」は、10度以下の低温に遭遇すると開花遅延をおこす恐れがありますので、早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。「神馬」は系統によって生育ステージ毎の適正な管理温度が異なりますので、栽培する系統に適した温度管理を確認しましょう。

◆ スイートピー

今月中下旬に発蕾・開花が始まります。草勢が弱い状態で開花・収穫を行うと草勢が著しく低下し、減収の原因になります。中旬までに、収穫に耐えられる株づくりを行い、収穫開始は葉の大きさなどから判断を行ってください。

曇天後の強日射や高温による生長点の焼け等、気象の大幅な変動による障害が発生しやすい時期ですので、根域を十分に確保するとともに光線管理等に気を配りましょう。

◆ デルフィニウム

中山間地では本格的な収穫が始まります。極端にかん水を控えると花のボリュームが低下しますので、適宜かん水や液肥を施用しましょう。収穫後の前処理では品質保持剤の濃度、処理時間を厳守しましょう。平坦地については中旬頃に発蕾が始まります。ボリュームを確保するためにかん水・追肥等適切な肥培管理を行ってください。

◆ トルコギキョウ

生育初期に乾燥状態になると活着・発根が悪くなりますので、十分にかん水しましょう。また、葉先枯れの発生しやすい品種については、草丈が10㍍前後の頃にかん水を控え、根系の発達を促し、併せて定期的にカルシウム剤を散布します。

追肥が後半にずれ込むとブラッシングの発生につながりますので、初期重点の追肥になるように液肥を施します。

◆ キイチゴ[ベビーハンズ]

暑さが和らぎ、伸長量が増え、秋の本格的な収穫が始まります。樹勢を維持するため中心のシュートを樹勢に応じて数本残し、その他の規格に達した

ものは地際から収穫します。葉傷み等で出荷できないものは来年3月に芽吹きで出荷が可能ですので、必要に応じて芽吹き用として維持しておきます。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

家畜にとって過ごしやすい季節になりますが、朝夕の寒暖差が大きいので、子牛、子豚、幼雛は換気と保温に注意します。3ヶ月齢までの子牛は温度変化に弱く、腹部が濡れた状態では風邪などを引きやすいので、敷料をこまめに取り替えるなど、牛舎環境に気をつけましょう。

乳牛に関しては、10月に入っても暑熱のストレスを受けています。ヒートストレスメーターをチェックし温湿度指数が67を下回る時期まで、寒冷紗で直射日光を遮ったり、牛舎ファンを回すなどの暑熱対策を続けましょう。

◆ 家畜防疫対策

養豚ではPDEなどの疾病予防のため、豚舎の消毒はもとより、人、車両、物資の消毒を徹底しましょう。

養鶏では冬場の鳥インフルエンザに備え、防鳥ネットの破れや隙間がないよう点検を行い野鳥や野生動物の侵入を防ぎましょう。出入り口の消毒、畜舎周辺の石灰消毒なども徹底しましょう。

◆ 飼料作物

飼料イネの普通期栽培については、ホールクロップサイレージの収穫時期を迎えます。糊熟期～黄熟期の収穫時期を守り、適正水分50～65%でロール・ラッピングします。予乾が長すぎて水分が40%を下回ると乳酸発酵せずサイレージになりませんので乾かしすぎに注意しましょう。

イタリアンライグラスやエンバクなどを植え付ける前には土壌分析を行い、適正な施肥管理（苦土石灰、ヨウリン等）を行いましょう。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

1 秋整枝の実施

秋整枝は、春整枝に比べて、芽揃いが良く摘採が3日程度早くなる反面、12月～3月の凍霜害を受けやすいため、防霜施設の有無といった茶園の立地条件や品種の早晩生等を考慮して実施します。

① 整枝の時期

秋整枝は、平均気温が18～19度以下になる頃を目安に行います。山間地域は9月下旬～10月上旬、広域霧島地域は10月中旬、沿海地域は10月下旬頃となります。

近年は、秋冬期の高温で秋整枝後に再萌芽する事例がみられますが、30㌔四方内の再萌芽数が二十芽以下であれば、収量・品質への影響は無視できる程度です。

一方、秋整枝の遅れによる越冬芽の充実不足は、収量・品質に影響が出てくるため適期を逃さないように注意しましょう。

② 整枝の高さ

整枝の高さは、最終摘採・整枝面から3～5㌔上で、葉層を8㌔以上確保できる位置で実施します。また、秋と春の2回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より一、二節高い位置で実施します。

2 病虫害の防除

今年は、カンザワハダニが多発している茶園が目につきます。秋整枝後の防除や冬期防除（マシン油）を実施し、ダニの越冬密度低減を図りましょう。また、県内の茶園でもチャトゲコナジラムの発生が確認されています。この害虫は、成虫が茶園を飛び回りますので、茶園の観察に努めましょう。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した際は、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

（黒木 清人）

◆ しいたけ

1 水分管理と環境整備

9～10月は、しいたけの基となる原基の形成が盛んな時期です。この頃原基づくりがしいたけの発生量に大きく影響しますので、ほだ木の水分補給に努めましょう。

また、暗くなったほだ場は間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境にするとともに、風が強く乾燥しやすいほだ場は、防風ネットの設置等環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

2 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常10月下旬～11月下旬の間で、葉が3～7割程度黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域でも、その年の気象条件や立地条件によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら、伐採に向けた準備を始めましょう。

(吉行 浩太郎)

◆ たばこ

本年の通常期販売も来月で終了となります。未出荷の方は出荷するまで、適切な貯蔵管理を行うようお願いします。

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

- 1 来年作の準備として、日当たり・風通し・排水など、条件の良いほだを早期に選定しましょう。新作地や借地は、事前に前作物の情報収集と土壌検定を実施し、来年作の施肥設計の参考にしましょう。
- 2 夏期・冬期深耕、耕耘作業は土壌環境改善と病原菌密度低下の為の重要な作業です。深耕、耕耘を繰り返し行い、耕種的防除に努めましょう。
- 3 良質堆肥10畝当1200kg以上の使用に向けて、堆肥材料を確保しましょう。切り返しは適度な水分状態（60%前後）を保ちながら、月1回程・年7回以上の切り返しを行い、腐熟促進に努めましょう。
- 4 出荷後は、来年の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫・作業場の整理整頓及び清掃を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

| 農作物名 | 病害虫名 | 発生量 | 発 生 状 況 と 防 除 対 策 |
|--|--|----------|--|
| 普通期水稲 | いもち病 ※※ | やや多 | 中山間地域や常発地での発生が見られます。葉いもちの発生が多いほ場では穂揃期に液剤または粉剤で防除します。 |
| 野菜・花き類 | ハスモンヨトウ等 チョウ目害虫 ※ | やや多 | 大豆、かんしょのほ場調査では平年並の発生ですが、フェロモントラップ調査による誘殺数は平年より多く推移しているため防除情報を発表しています。幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。 |
| 施設野菜全般 | 土壌病害虫 | — | 台風等による大雨でほ場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあるので、排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行います。 |
| トマト | トマト黄化葉巻病 (TYLCV) | — | いずれのウイルスも、微小昆虫（タバココナジラミ、ミナミキロアザミウマ）によって媒介されるので、施設開口部には必ず防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を防止します。これらの微小昆虫は、一旦増加すると防除が難しいので、発生初期の防除が重要です。特に、ミナミキロアザミウマが媒介する黄化えそ病(MYSV)に注意が必要です。 |
| ウリ類 | 黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン 退緑黄化病(CCYV) | — — | |
| いちご | 炭疽病、萎黄病 その他の病害虫 | — — | 苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後の多発につながるため、定植前に苗の防除を徹底し、本ばに病害虫を持ち込まないよう注意します。 |
| 果樹全般 | 果樹カメムシ類 | — | 7～8月にチャバネアオカメムシが多く誘殺されましたが現在は少なくなっています。地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。 |
| カンキツ類 (露地栽培) | 黒点病 ミカンハダニ | やや多 並 | 黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、降水量が少なくても1カ月毎の防除を行います。 生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないので、発生初期（寄生葉率30%、または1葉当り虫数0.5～1頭）に防除します。 収穫前の早生みかん等では収穫前使用日数等に注意します。 |
| 茶 | カンザワハダニ | やや少 | 防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発現防止に留意します。 |
| | クワシロカイガラムシ | 並 | 薬剤散布量は成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布します。 |
| | チャトゲコナジラミ | — | 成虫は新芽に、幼虫はすそ部古葉に寄生するためよく観察し防除を行います。 |
| <p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※※は注意報を、※は防除情報を発表しています。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki です。</p> | | | |